

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0773200563		
法人名	有限会社 秋 桜		
事業所名	グループホーム 虹の家		
所在地	福島県双葉郡浪江町大字立野字根渡183番地(現在地:福島県本宮市荒井字山)		
自己評価作成日	令和4年10月10日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigo-fukushima.info/fukushima/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 福祉ネットワーク
所在地	〒974-8232 福島県いわき市錦町大島2番地
訪問調査日	令和4年11月17日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

--

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

管理者は職員の自主性と意見を尊重することで、職員は理念を理解し、事業所の目指すケアのあり方と質の向上に取り組むことができている。 地域密着型サービスの在り方を考え、行政や地域と連携し、事業所が地域の中で果たすべき役割と貢献できる方法を模索し続けている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者や職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに ○ 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている ○ 3. あまり増えていない 4. 全くない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごさせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	全体会議で基本理念を提示し、理解を深めている。基本理念を元に一人一人個性を大切に、その人らしく生活ができるように職員間で共有し、実践に努めている。	開設時、一人ひとりの個性を大切に支援を心掛けることを基本に理念を作成している。職員には、その人らしさをさどんな時でも大切に考えた介護をすることを伝えている。理念を理解し、個性を大切に介護ができていないか振り返り考える場を設けている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	施設が避難している立場上、地域との交流は難しくなっているが、コロナ前は本宮市社協と連携し、学生ボランティアや傾聴ボランティアを受け入れていた。	広報が郵送され町の状況を知り、散歩等で地域の人の挨拶を心掛けている。コロナ前は、社会福祉協議会と連携し、中高生のサマーボランティアの受け入れ。毎年の虹の家のまつりには、マジックやハーモニカ、フラダンス等の団体に来て貰っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	浪江町で行われる会議のメンバーとなり、認知症の理解や今後の浪江町の福祉環境の復興に関わっている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1度開催を行っている。コロナ感染予防の徹底もあり、感染者の状況を見て開催している。感染者が多い時には、会議内容の報告を文章にて運営推進員へ出している。会議には入居者も参加しており、外部の方の意見を聞いてサービスに活かしている。	会議で面会について、リモート通話ができるネット回線の提案があり、回線環境の整備をしている。何家族かの利用があり、互いに顔を見ながらの会話を喜んでいる。会議を通して、事業所単独では解決できない事項を話し合い意見を求めている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	町役場の介護係、包括支援センターとの連絡を取り合いながら、相互に協力できるように勤めている。待機者の情報や入居希望の相談など常に連絡を取り合っている。	避難している市町村の包括支援センターや介護係の情報から入居が望ましいと思われた住民の相談を受けている。介護に関する情報を定期的に行われる介護支援専門員連絡会などで情報提供されている。介護支援専門員連絡会を通し、当事業所の実状を説明している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	夜間以外は施錠をしていない。また、センサーの利用も、ケア会議で話し合い、転倒の危険性の高い方のみ、家族の同意を得て使用している。身体拘束について施設内でも研修を行っている。職員が不安や疑問に思うことなどを確認したり、話し合いを行っている。	入居者本人の生活を大切に考え、日頃より身体拘束にならないように話し合いながら介護している。言葉の拘束について気づいたときは、自分で気づくことは難しいため、どんな声掛けをしているのかを気付けるように虐待の芽チェックリストを定期的に職員が行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待防止の研修があれば、積極的に受けており、全体会議の際に研修について報告をしている。日常では、職員が声を掛け合い、見えるケア介助を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見人制度についての研修を受け、全体会議で報告を行ったり、資料をおき自由に閲覧できるようにしている。また、何かわからないことがあれば、町役場に聴いて制度内容を深めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居時に契約内容を説明し、疑問などがあれば何うようにし理解、同意を得るようにして契約を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	定期的に運営推進会議を開き、入居者、家族、外部の意見を聴くようにしている。職員からは、全体会議で意見を聴くようにしている。何か意見や要望があれば、検討できるだけ反映できるようにしている。	運営推進会議に家族代表、利用者代表に参加してもらい、面会についての受け入れなど事業所の考えを伝え、家族や推進員の意見を聴き進めている。話し合った内容については、議事録を玄関先で閲覧できるようにしている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	運営の決定に関しては、役員だけでなく内容によっては、ユニットリーダーを交え、話し合いを持っている。職員の意見は、全体会議や管理者またはユニットリーダーへ話しやすい関係や環境に努めている。	パートから正社員への希望があり、他職員からも意見を聴き、正社員の勤務としている。希望する休日や有給休暇を取得できるよう、働く環境の整備をしている。資格取得の希望者には、講習等に参加できるよう勤務変更などを行っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	就業規則に職位、職責を設定し、資格や研修等で給与を決定している。また、希望休を月2日を採用し、働きやすい環境を整備している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員の希望や力量に合った研修に参加できるように努めている。介護経験のない職員には、介護の基本を学んでもらえるように指導している。毎日の業務の中で疑問や不安なことがあれば、質問し助言をもらえるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ感染予防で、Web研修に参加している。他事業所の方と交流を図ることができる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	日常生活の中で会話を通してどうしたいのか、何か困っていることがないかなどを聴き、要望に沿えるように努めている。コミュニケーションを多く持ち、チームで共有し対応している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入所時に本人と家族の介護に対する意向を聴き、できるだけ要望に添った支援を行なうよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ケアマネが本人と家族の意向を確認し、ケアプランに反映し支援できるように努めている。また、入所時には、実態調査から得た状況を管理者、看護師、職員と共有し、必要な支援など話し合い、支援を共有し入居を迎え入れている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人がやりたいことができることを職員と一緒にやっている。終わった時には、必ず感謝の気持ちを伝えるようにしている。できるだけ、本人がやりたいことは、否定せずに行えるように努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ感染予防で家族には面会の規制をお願いしているが、リモート通話をできる環境を整えたり、家族と電話で会話する機会を設けている。コロナ感染の状況をみて、家族との面会の規制を緩和するなど行っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居者同士が同じ町民ということもあり、以前からの知り合いも多く、別棟へ行き来し交流を図っている。会話の中に浪江の話や家族の話を取り入れ、会話を楽しんでいる。	世話になっている美容室に訪問して貰い散髪をしたり、昔の話などで利用者が安心して過ごせるように心掛けている。面会は、玄関先で短時間で距離を置いて話をしたり、リモート通話できる設定を行い、いつでも顔を見ながら話ができるようにしている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ユニット内での入居者同士のトラブルもなくレク活動や個別で出来る支援を行なっている。皆で一緒にできることは、協力して行ってもらっている。会話に混ざれない利用者がいる時は、職員が間に入り一緒に会話には入れるように配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	1か月以上の長期入院となった時、契約の解除となるが、退院の見込みがあれば、契約の解除とせずに待つようにしている。その間、家族へ連絡し状況の把握をしている。 また、退所後相談などがあれば、いつでも来所して頂けるようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	意思を表現できる利用者は、担当者会議に意向を聴き、プランに入れ支援するようにしている。本人にも計画内容を伝え、意欲的に行うことができるようにしている。困難な場合は、チームで話し合った支援を行っている。	入浴時や余暇の時間に職員と一対一になった時などに思いを聞くことが多い。把握した思いや意向は、担当者会議やケア会議で共有している。本人の意向や思いを把握できるようにケアプランにのせて、職員や家族にも伝えることができるようにしている	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所前の実態調査には、必ず自宅に伺い本人の生活環境を把握するようにしている。生活歴や暮らし方を職員全員で共有できるようにしている。入所後も今までの生活歴や大切にしてきたことなど知り得たことは、職員間で把握できるようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の生活や健康状態など記録に残し、職員間で共有している。一人一人の状態が違う為、その人に合わせた過ごし方ができるように努めている。また、毎日の活動も立位保持ができる人には、洗濯干しやできない人には洗濯たたみなど身体状況や認知状態に応じて行ってもらっている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	3か月に1度、モニタリングを行いその時に合った必要なケアを担当者会議で話し合い、ケアプランを作成している。ケアプラン作成には、本人の意向、家族の意向も反映できるようにしている。	残存機能を維持できるように、できなくなったことだけでなく出来ることを活かせるプランの作成を心掛けている。変更となる時は、職員全員に共有できるように記録や申し送りに記入、医師の意見が欲しい時には、看護師が主治医に状況を伝え意見をもらえるようにしてる。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	介護記録に介護計画書に基づいた内容と本人の状態など毎日記録している。また、連絡ノートを活用して、情報の共有を図っている。月1回のケア会議にて状況に合わせた支援の見直しを行なっている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	コロナ感染の状況で外出は難しいが、希望に添える範囲で行っている。畑作業では、植えたい作物など職員と話し合い、種まきから収穫まで畑づくりを行っている。入居者が食べたいものなどを時々聴いて食事メニューやおやつを提供している。誕生日には、本人の食べたいものを聴きお祝い食を提供している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	仮設住宅から利用している美容室を利用しており、入居者も顔なじみとなり、安心して散髪をしてもらうことができている。カットやカラーリングの要望があれば、個別に送迎や付き添いを行っている。地産地消の新鮮な野菜を食べることができるよう、野菜直売所から季節野菜を仕入れている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所時に協力医の説明を行い、本人または家族の同意を得ている。内科、歯科ともに協力医として連携をとり、場合によっては訪問診療を受けている。初回受診時には、家族にも同行してもらい、医師と家族の関係も築くことができるようにしている。治療についての意向を都度家族に相談しながら進めている。何かあれば、家族の同行受診をお願いしている。	かかりつけ医を変更しても治療中の疾患に支障がないか家族や医療機関に確認し、継続受診が難しい方事業所と連携している医療機関に紹介状をお願いしている。受診は、状況によっては、看護師同行で家族に付き添って貰っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	正看護師が常勤しており、介護職と常に連携を密にして対応している。適切な医療支援ができるよう何かあればすぐに主治医に報告し、指示を仰ぐような体制をつくっている。必要があれば、主治医と相談し、訪問看護の利用の調整を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には看護師が中心となって進めている。入院した際には、病院の連携室のワーカーに連絡し、状況の把握をしている。こまめに病院と連絡を取り、状況把握を行い、早期退院に向けて話し合っている。コロナ前は、病院へ行き、本人と面会し状態を確認していたが、今は電話で行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時には、終末期に向けた意向調査を行っている。終末期を迎えた時には、主治医へ相談し訪問看護と協働し体制を整えている。状態の変化時にわかりやすいように家族へ説明し、意向を確認しながら進めている。終末期となった時には、チームで支援について会議を行い、共有した情報で進めていけるようにしている。	身体状況の変化などから治療についての意向を聴き、終末期を事業所で迎えたいとの意向であれば、看取り介護を行うようにしている。看取り介護については、定期的に職員全員に研修を行い、研修の案内があれば、研修を受けるようにしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	マニュアルを作成し、いつでも見れるところに掲示している。AEDを設置し、緊急時に備えており、また職員全員が使用できるように講習を行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	マニュアルを作成し、年3回の防災避難訓練を行っている。避難の仕方、消火器の使い方、通報の仕方などを身につけている。その他の自然災害については、市役所の担当者に相談している。	消防署立ち合いの訓練後に、初期消火がとても重要であること入居者の誘導は火元から遠ざけていく等のアドバイスを貰い、それに基づいて訓練を行っている。非常食の缶詰を備蓄し、日常使う食材の在庫を多くして循環させるようにしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	年に数回、入居者への尊厳やプライバシーに関する振り返りアンケートを職員全員が行っている。アンケートを行うことで日頃の対応の再確認が行えている。否定するような声掛けや子ども扱いはしないように心掛けている。排泄時のトイレや居室のドアノックを心掛け、プライバシーに配慮している。	一人ひとり人格や個性を尊重した関りができるように心がけ、プライバシーを確保し、安全・安心に生活できるようにしている。言葉かけやコミュニケーションでは、相手の視界に入り、目線を合わせて声をかけ、声のトーン、話す速さなどその人に合わせるようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	職員が決めつけや先回りして行うことがないようにしている。出来るだけ、自分から発したり、選んだりできるように働きかけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	ホームでの1日の流れはあるが、参加などは本人の意向に任せている。その日、本人がやりたい活動を行ってもらっている。出来るだけ、入居者一人一人の話を傾聴し「ちょっと待って」の声掛けを言わないように心掛けている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に散髪を行ったり、季節に合わせた服を自分で選べるように支援している。起床時にはパジャマから服に着替え、整容を行うことを習慣としている。汚れた衣類は交換し清潔を心掛けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者と一緒に何が食べたいかを一緒に考えたり、盛り付けや簡単な調理、野菜の皮むきなど行ってもらっている。季節を感じられる食材や行事食を提供している。クリの皮むきや干し柿づくり、芋がらづくりなど季節感を楽しんでいる。	食事係の職員が季節の食材を取り入れたり、行事に合わせたメニューを作成している。馴染みのある味付けや調理法を取り入れ、栄養バランスや、食べやすさに工夫している。食事に時間がかかる方には、早めに提供し、食べ終えるまで待つようにしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	体調や疾患に合わせて摂取量を決めて提供している。嚥下や噛む力に合わせて食材の刻み方を個別に提供している。嫌いなものがあれば、別のものを提供するようにしている。ポットから自分で注げる入居者は、好きな時に注いで飲むことができるように設置している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを行っている。一人で出来ない入居者は、すべて介助することなく、できない動作を介助するようにしており、職員間で統一して行っている。義歯や歯ブラシは、夜間に消毒している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄パターンを把握しそれに合わせてトイレ誘導を行うようにしている。毎月のケア会議で、オムツの種類やパットの大きさなど排泄用具が今の排泄状態に適しているか話し合っている。	トイレでの排泄を目標とし、オムツ、布パンツなど一人ひとり使用状況は違っても、日中可能な限りトイレでの排泄ができるよう支援している。失敗しても、羞恥心に配慮し、手早く着替えをしたり、後片付けを行い、本人が安心する声掛けをするようにしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘のある方は、主治医に相談しているほか、食事の際になるべく多くの食物繊維のあるものや水分を摂るように促し状態に応じてセンナ茶の飲用をしている。便の状態や有無を記録している。個人個人の状態を把握して、その方にあつた対応をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそつた支援をしている	入浴は、午後に行っている。1日おきや3日に1度など本人の要望を聴いて入浴している。入浴の際には、職員との会話をしたり気持ちがリラックスして入ることができるように心掛けている。身体状態に応じて、2人介助対応や曜日を決定している入居者もいる。	入浴を嫌がる人には、無理強いをしない、入浴したいときは、一緒に気持ちよかつた、さっぱりしたという気持ちを共感する声掛けしている。脱衣所には、ファンヒーターを設置し、浴室は、シャワーを事前に出しておき温め、ヒートショックなどを防ぐ対策をしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の生活リズムに合わせて起床や就寝をしてもらっている。日中は本人の身体状況に合わせて休息できるようにしている。昼寝の時間も本人に任せている。布団に気持ちよく入ることができるように常に寝具を整えている。また、布団干しやリネンの交換、洗濯を定期的に行っている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医療ファイルを作成してあり、個人の服薬表がいつでも見れるようになっている。薬の用法、用量は看護師から説明を受けて、情報を申し伝えている。服薬時には、服薬ミスがないように二重に確認し、責任をもって服薬介助できるようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	今までやってきた清掃や台所作業、洗濯など家事に関わることや生活歴から趣味や好きなことなど一緒に行えることをみつけ関わってもらっている。草むしりや畑仕事など外の仕事や定期的にみんなでクッキングを楽しんだりしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそつて、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ感染予防のため、今は個々の希望に沿って外出は控えているが、バス旅行で車内から紅葉狩りやドライブなど出かけている。	外気浴で、気分転換、生活リズムを整える、骨粗鬆症の予防などがあることを職員間で共有し可能な限り外気浴を行っている。購入したいものなどがあれば職員と買い物に出かけ、自分で品物を見て購入している。選挙の投票には、職員が同行している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	自己管理が可能な方や自分で持っていたい方は、小遣いとして所持しているが、今はコロナ感染予防のため、一人ひとりが使えない場がない。必要なものがあれば、本人の要望を聴いて預かっているお金で購入している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人から希望があれば、いつでも電話で話せるようにしている。自室でゆっくりと話ができるように配慮している。また、こちらから家族へ電話をした時には、本人と替わり電話で話をしてもらえるようにしている。年賀状や暑中お見舞いなど家族へ送っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有のスペースには、季節が感じられる飾りや生花を飾っている。共有で使用するトイレは、汚れがあれば都度掃除を行い、快適に使用できるようにしている。夏の暑い時には、室温や湿度によりエアコンの調整を行うようにしていた。	一人ひとりが好きな場所で、テレビを観たり、刺し子や編み物、塗り絵などをして自由に過ごしている。廊下は、転倒や躓きなく移動できるように物を置かず、動線を想定した動きやすさに配慮している。定期的に換気を行い、消毒などで感染症対策をしている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファを配置して好きな時にくつろいで過ごすことができるようにしている。それぞれ好きな事、やれることをして過ごしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室、或いは泊まりの部屋は、プライバシーを大切に本人や家族と相談しながら、居心地よく、安心して過ごせる環境整備の配慮がされている。(グループホームの場合)利用者一人ひとりの居室について、馴染みの物を活かしてその人らしく暮らせる部屋となるよう配慮されている。	入居の際に今まで愛着のある物を持ってきてもらっている。居室には家族の写真や作品を飾っている。写真は本人が若かったころや亡くなった夫の写真、家族みんなで写っている写真など個々に違っている。ベットなどは、本人の身体状態などに応じて配置している。	麻痺状態や動きやすい動線など個々に合ったベッドや家具の配置にしている。居室を間違わないよう、入り口に目印の花紙を飾るなどしている。清掃は毎朝行い、衣替えや居室の環境整備は、本人と一緒に確認しながら職員が行い、整理整頓し清潔にしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室内のベットや家具の配置は、本人の身体状況などに応じて配置している。動きやすい動線で自分で出来ることを見守るようにしている。できるだけ、残された能力で出来ることを継続できるようにしている。		